

講座日本文学

6

中世編Ⅱ

211586



日文 701529375

講座 日本文学 6

中世編Ⅱ

全国大学国語国文学会監修

三省堂





N. D. C. 分類番号 910

A 5 判総ページ 274

講座 日本文学 6

中世編 II

定価 580 円

昭和44年1月20日 初版発行

©

監修者 全国大学国語国文学会

代表 久松 潜一

発行者 株式会社 三省堂

代表者 小倉 正風

東京都千代田区神田神保町1の1

発行所 株式会社 三省堂

電話東京 (293) 3441 (大代表)

振替口座東京 54300

(講座日本文学6)

文学講座について

日本文学の研究は進んで来たが、これを発表するには學術雑誌の論文という形態が中心をなしている。これは自然科学の研究の場合と同様である。しかしそれがある段階で研究をまとめる意味で論文集ともなる。また学界に於ける研究の到達した水準をある段階で日本文学講座という形でまとめることも広く行われている方法である。日本文学講座としては早く新潮社日本文学講座があり、改造社の日本文学講座もあり雄山閣の國語國文学講座がある。そうして岩波書店の日本文学講座に到ってその内容も一段と高くなり、当時至り得た日本文学研究を集成し得た感があつた。戦後になって日本文学講座も一、二出て、河出書房の日本文学講座、岩波書店の日本文学史講座など新しい研究が発表されたが、日本文学の研究はその後進展してやまない。新しい資料が発掘され、各古典の本文批評も行われ、注釈書も種々現れている。それとともに文学批評や文学史研究も盛んである。

文学講座では中心になるのは文学史研究である。文学史はある意味で文学研究の綜合されたもので、文学の理論や文学批評と歴史的研究とが綜合されている。文学史は文学の史的展開であり、その点では文化史の一分野であるが、然し文学である限り、その評価の基準に於て美意識や美的理念を重んじねばならない。史的展開の叙述であると言っても事実の羅列にとどまらず、それを統一し組織づける規程がなければならぬからである。

この講座では時代別に扱うのであるが、史的区分として上代、中古、中世、近世、近代という区分を行うことにな

っている。それに総論の意味で日本文学の諸問題や日本文学の周辺に関する問題を扱うことにし、更に別巻として日本文学の近代に於ける研究書を挙げて解説することになっている。研究書は明治以前にも多くあるが、明治以後は一層多くなっている。明治、大正期は文芸に関する雑誌は多くあったが、日本文学もしくは国文学の学術雑誌は少なかった。明治期の「歌学」という雑誌には当時の歌学、国文学に関する論文が多く収められているが余りながくつづかなかった。それについては「國學院雑誌」「帝國文学」「藝文」など挙げるべきであろうが、後の二は国文学に限らず広く各国の文学にわたっている。國學院雑誌は今に継続しているが、大正十二年の大震災以後に「國語と國文学」が発行され、ついで「國語國文の研究」が刊行され、それ以後、国文学の雑誌も種々現れ、国語、国文学に関する論文も多く発表されるに至った。

学術雑誌に発表される論文は研究の水準を示すべきものであろう。昭和二十年以後には各大学の紀要も多く出て、一層その研究の発表も盛んになった。それにとまって国語、国文学の学会も多く設立され、それらの学会による研究発表も盛んになり、それだけ学問的に進んで来た。ただ専門はいよいよ分化され、論文も微視的研究が多くなった。精緻な論文が多いことは喜ばしいことであるが、一方で学問の全視野に於ける見通しをつけ、今日まで到達したものを統一的に集成する必要も生ずる。その集成の上で新しい創造も期待されるのである。

この「講座 日本文学」の刊行の意義もそのような点にあると信ずるのである。三省堂がこの講座を企画するに当たり、全国大学国語国文学会が監修するに至ったのもその点にあるのである。

昭和四十三年九月

全国大学国語国文学会

代表 久松 潜 一

目次

史論と歴史物語

木藤才蔵 1

南北朝・室町時代の和歌

井上宗雄 25

連歌の成立と展開

金子金治郎 61

心敬・宗祇

伊地知鐵男 103

御伽草子

岡見正雄 127

——絵草子の問題に関して——

軍記物語の展開

富倉徳次郎

147
(4)

世阿弥

表章

165

——その能芸論展開の時期的区分を中心に——

中世の歌謡

新聞進一

193

室町時代末期の語りもの

室木弥太郎

217

中世の国語

佐藤喜代治

239

執筆者紹介

267

史論と歴史物語

木
藤
才
蔵

愚管抄

一

『愚管抄』に関する研究は、おびただしいものがあるが、これを文学書とみなす観点から論じた研究は、皆無といつてもよいのではないかと思う。『愚管抄』の著者慈円（久寿二―嘉禄元
一一五五―一二三五）にしる、この書が文学的に読まれることは予想したこともなかったであろう。それにもかかわらず、『愚管抄』を中世文学史の中で取りあげるのが近頃の一般的な傾向になっているのは、『愚管抄』が日本民族の生んだ最初の史論であり、史論も広義の文学のうちに含めて考えるべきだという見解によるものであろう。

これまでの愚管抄研究は、諸本・成立・著者などに関する基礎的研究は別として、ほとんどその史観と道理の意味とが問題にされてきた。『愚管抄』が道理物語とも呼ばれ注目すべき書とされたのは、その特異な史観のためであるから、これは当然のことである。しかし、『愚管抄』を文学史の中に位置づけて扱う以上、この書が史書であると同時に文学的な一面を有するゆえんについて、言及しないわけにはいかないであろう。私はこの点に関して、『愚管抄』は著者慈円の全力を傾注した、きわめて個性的な作品である点に、その文学性を認めたいと思うのである。

二

『愚管抄』の歴史観は、成住壊空の四劫観、正像末の三時説、百王思想等に基礎を置いている。これらの思想はいず

れも、古代末期から中世初期に至る知識人たちの心を深く支配していた思想であるけれども、『愚管抄』においてはその力点の置所や解釈の仕方にいささか特色があるように考えられる。まず、四劫観についていえば、これは一つの世界の形成から消滅空無に至る過程を四つの段階に分けて考える世界観であって、そこで単位とされている時間は、八万歳の人の寿命が百年に一年ずつの割でつづまって十歳になり、さらにそれとは逆に、十歳から百年に一年ずつの割で命が伸びて八万歳になる間である。成・住・壞・空の四劫において、この気の遠くなるような長い時間を、それぞれ二十ずつ経過する間に、世界があらたに形成され、形成されたままの状態を続け、その後それが破壊し尽され、ついに空無の状態を続けることになる。この過程を無限にくり返すというのが、成住壞空の四劫観である。

この四劫中、住劫の第九の滅劫の中で展開していくのが現在の人間の歴史であり、八万歳の人寿が減じ減じて百歳に至ったときに、釈迦が出現したという説は『大鏡』や『水鏡』などの歴史物語にも説かれている。慈円はこの第九の滅劫の釈迦入滅以後の人間の歴史をさらにこまかに区分して、正像末の三時に分け、その上にさらに中国の讖緯思想に基く「一都」の觀念をもちこんでいる。

又世間ハ一都ト申テ一都ガホドヲバ六十年ト申、支干オナジ年ニメグリカヘルホドナリ。コノホドヲハカラヒ、次第二オトロヘテハ又オコリノシテ、オコルタビハ、オトロヘタリツルヲ、スコシモチオコシノシテノミコソ、今日マデ世モ人モ侍ルメレ（巻三）

四劫観も三時説も、慈円の生きていた中世初期という時点を、劫末への下降の一過程としてとらえる世界観で、それは人力をもつてしてはいかんともしがたいものであった。しかし、この絶望的といえる下降の世界観の大わくの中に、一時的な持ち起こしの可能性を見たところに、慈円の歴史観の特色を見ることができるのである。（この点については

の成立とその思想「東北大学文学部
研究年報」に詳細に論ぜられている）

（石田一良「愚管抄」

さらに、『愚管抄』においては、正像末の三時説に關しても、祇尊の入滅後、時代が下るにしたがつて、仏の教えが次第に行なわれなくなるといふ意味よりは、王法が次第に衰えて、世の中が乱れていくといふ意味に力点をおいて用いられていることに注目すべきであらう。

人代ノハジメ成務マデ、サワくト皇子くツガセ給テ正法トミエタリ（巻三）

寛平マデハ上古正法ノスエトオボユ。延喜・天曆ハソノスエ、中古ノハジメニテ、メデタクテシカモ又ケチカクモナリケリ（巻三）

末代惡世、武士ガ世ニナリハテ、末法ニモイリニタレバ（巻七）

右にあげたような正法・末法の考え方は、王法中心の思想によるもので、宗教的というよりは、政治的立場に立つものといえる。慈円は、この王法の衰えを宿命的なものとなして見たけれども、その時々に応じた手段を講ずれば、王法の衰えは、一時的に防ぎ得るというふうに考えていたようである。したがって、当時一般に信ぜられていた百王思想に關しても、百帖の紙を使いへらしては新らしく補給し、何度も何度も補給をくり返しては使うように、衰えたものを、もち直していくべきものとして説いている。その点で、『愚管抄』の史観は、末法思想を信ぜざるを得ないような状況のもとにありながら、その中に一筋の活路を見出そうとする意欲のもとに、うち立てられたものであることは否定できないであらう。

『愚管抄』の性格を考える場合に、もう一つ見落としてはならないことは、慈円がこの世の中に生起する現象には、それぞれに深い道理が含まれており、歴史的現象としても、その例に洩れるものではないと考えていたことである。慈円が歴史上の問題点や疑問を起こさせる箇所を目をつけ、現象の背後にある道理を探り求めているのは、そこに特に深い道理がひそんでいると考えたからである。その場合に、いくつかの条件をあげて、その中で可能な限り合理的な

考えをしようというのが、慈円の歴史解釈の方法であつた。しかし、その根底には、個々の歴史現象は、神仏の予定した筋道にしたがつて生起するものであるという前提があるようである。神は時折、その真実の一端を啓示することがある。したがって、靈告の意味を考えることによって、未来をも予見することが可能であるというのが、慈円の考えであつた。『愚管抄』を執筆した根本の動機も、靈告を得てその意味を歴史の中に求めようとしたところにあつたようである。（赤松俊秀「愚管抄について」
『鎌倉仏教の研究』に収録）

三

以上に見て来たように、『愚管抄』の史観は、その根本において神秘的色彩の濃いものであるけれども、そのわくの中で可能な限り筋の通った解釈をして事象の中に秘められている法則を見出そうとする所に特色があつた。この特色は、慈円の史観が、現実的な方策と固く結びついていたことと関連があるようである。

『愚管抄』執筆当時、慈円の期待は当時二歳の東宮と將軍頼經の前途にかけられていた。公武の衝突をあと二十年間回避することができれば、天皇と將軍による君臣水魚の政治が遂行できると信じていたためである。頼經が將軍に迎へられたことに關して、『愚管抄』巻七には、「イマ左大臣ノ子ヲ武士ノ大將軍ニ、一定八幡大菩薩ノナサセ給ヒヌ。人ノスル事ニアラズ、一定神々ノシイダサセ給ヒヌルヨトミユル、フカシギノ事ノイデキ侍リヌル也」「コノ東宮、コノ將軍ト云ハワヅカニ二歳ノ少人ナリ。コレヲツクリイデ給フコトハヒトヘニ宗廟ノ神ノ御サタアラハナル」などと、くり返しくり返し、それが神意に出たものであることを力説している。頼經の將軍就任が、慈円にとって、なぜ神意としか考えられなかつたかという、眼前に生起する事象の意味を歴史的に考察した結果、このほかに王法の破壊を救う道はないという結論に達したからである。しかもこうした判断が、事象の背後に神慮が働いているという前

提に立つてなされたものであることは、先に述べてきたとおりである。その結論の導き出された筋道を『愚管抄』にするところによって示せば、次のとおりである。

国王ニハ国王フルマイヨクセン人ノヨカルベキニ、日本国ノナラヒハ、国王種姓ノ人ナラヌスデヲ国王ニハスマジト、神ノ代ヨリサダメタル国ナリ。ソノ中ニハ又ヲナジクハヨカラントネガフハ、又世ノナラヒ也。

ソレニカナラズシモワレカラノ手ゴミニメデタクヲハシマス事ノカタケレバ、御ウシロミヲ用テ大臣ト云臣下ヲナシテ、仰合ツ、世ヲバヲコナヘトサダメツル也。(中略)

太神宮・八幡大菩薩ノ御ヲシヘノヤウハ、「御ウシロミノ臣下トスコシモ心ヲオカズヲハシマセ」トテ、魚水合体ノ礼ト云コトヲサダメラレタル也。コレ計ニテ天下ノヲサマリミダル、事ハ侍ナリ。アマノコヤネノミコトニ、アマテルヲオン神ノ、「トノ、ウチニサブライテヨクフセギマモレ」ト御一諾ヲハルカニシ、スヘノタガウベキヤウノ露バカリモナキ道理ヲエテ、藤氏ノ三功トイフ事イデキヌ。(中略)

今ハ又武者ノイデキテ、將軍トテ、君ト撰録ノ家トヲオシコメテ世ヲトリタルコトノ、世ノハテニハ侍ホドニ、此武將ヲミナウシナイハテ、誰ニモ郎従トナルベキ武士バカリニナシテ、ソノ將軍ニハ、撰録ノ臣ノ家ノ君公ヲナサレヌル事ノ、イカニモく、宗廟神ノ猶君臣合体シテ昔ニカヘリテ、世ヲシバシ、ヲサメントヲボシタルニテ侍レバ、ソノ始終ヲ申トヲシ侍ベキ也。

『愚管抄』巻七に見える右の記述は、巻三から巻六にわたって、日本の歴史の移り変わりを精細に考察して来た上での一つの結論を示したものであり、それは頼經の將軍就任を足がかりにして、当面の危機を回避しようとする慈円の方策を、完全に支持するものであった。というよりは、危機を意識した慈円が、起死回生の方策を模索すると同時に、歴史のうちに秘められている道理をさぐり求めていくうちに、方策と並行して見出されたのが、この結論であったと

いうべきであろうか。

ところで、慈円が下降していく王法の歴史の中で、特に危機と感じたのは、源頼朝の没した正治元年（二九〇）から承久元年に至る二十年間である。⁽¹⁾この二十年間は、武士たちを統率すべき源氏の將軍が次々に死去してついに源將軍家の血統が絶え、無秩序の時代の到来が予想されたこと、しかも、後鳥羽院がわに、この難局を切り抜けるに足るだけの方策も用意されていず人材もいないと感じたことが、慈円をして王法の破滅を予感させたのであろう。

又武士將軍ヲウシナイテ、我身ニハヲソロシキ物モナクテ、地頭くトテ、ミナ日本国ノ所当トリモチタリ。
院ノ御コトヲバ、近臣ノワキ、地頭ノ得分ニテコソグレバ、エマズト云事ナシ。武士ナレバ、當時心ニカナハヌ物ヲバ、ヲレくトニラミツレバ、手ムカイスル物ナシ。タゞ心ニマカセテント、ヒシト案ジタリト今ハミユメリ。サテコレヲノヒガ事ノツモリテ大乱ニナリテ、コノ世ハ我モ人モホロビハテナンズラン。

しかし、危機の意識のきわまったところで、この難局を切り抜ける手がかりが突如として出て来た。それが頼經の將軍就任である。この頼經の將軍就任を起点として、慈円独特の方策は形を整え、その歴史観は急速に具体化していったものと考えられる。四劫観を引用するに当たって、特に、「オトロヘテハオコリ、オコリテハオトロヘ」する点に重点を置いているのも、院政以来、王法の衰えの極まったところで回生の法を見出したと感じたことと深く関連していると思われる。

『愚管抄』著作の目的が、後鳥羽院による討幕計画を阻止するにあったことは、巻七にしるすところによって明らかであるが、この事は院政権に対決することを意味し、それはまた院を補佐している近臣たちの存在をも否とすることを意味していた。慈円が、国王を補佐すべく神代から定められていた摂籙家の役割に、あらためて思いをいたし、ひいては国王と王臣との関係を歴史の中にさぐり求めようと意図したのも、現実の状況がそれを必要としたのである。

それに、天台座主を四度つとめたことのある慈円にとって、王法を守護すべきものとしての仏法の役割が、歴史をふりかえってみる場合の主軸の一つになったのも当然のことといえよう。

このようにして、『愚管抄』においては、国王と王臣特に摂籙家との関係、それに王法と仏法との関係を明らかにすることが、重要な課題になった。この史書は、その意味で、摂家の出身であり天台宗の高僧であつた慈円の学識・思想・願望と密着し過ぎるほど密着した作品といえる。それはとにかくとして、現象の中に道理を見ようとした慈円は、歴史物語の作者があえて語ろうとしなかつた乱世の現実を中心にすえ、下降の過程の中で持ち起こし持ち起こしする現象に目を向けて独特の歴史を構成した。慈円が、ハタト・ムズト・キト・シャクト・ギョトなどという俗語を使うことに深い意味を見出したのも、乱世の現実にもそれ相応の道理があるとする彼の史観と決して無関係ではないように考えられる。

『愚管抄』は新古今時代を代表する歌人としての慈円の意識を完全に捨て去つたところに成立している。それにもかかわらず、この書の中にある種の文学性を感じることができるのは、この時代の人々の心を強くとらえて放さなかつた宿命的な世界観のわくの中で、知力の限りをふりしぼって運命を切り開く道を見出そうとした著者の執拗な精神が、事象の解釈の仕方にも、またその文体にも強く浸透していて、極めて個性的な作品を構成しているからであろう。

神皇正統記

一

『神皇正統記』も『愚管抄』と同様に、その著者の北畠親房（永仁元—正平九）は、この書が文学書として扱われることは夢にも考えなかったものと思われる。それにもかかわらず、この書の文学性について考察した論文は一、二にとどまらない。⁽⁴⁾これは『正統記』が読者を感動させる何ものかをもつていたためだと考えられる。しかし、『正統記』の文学性を考察するためには、本書のどういふ点が読者を感動させて来たかが問題にされなければならないであろう。その事を考慮にいれながら、『正統記』をあらわした目的、そのために本書がとった構成、および叙述について、次に考察したいと思うのである。

『神皇正統記』をあらわした目的については、著者みずから、「神代ヨリ正理ニテウケ伝ヘルイハレヲ述コトヲ志デ、常ニ聞ユル事ヲバノセズ。シカレバ神皇ノ正統記トヤ名ケ侍ベキ」といい。また、「大カタ天皇ノ世ツギヲシルセルフミ、昔ヨリ今ニ至ルマデ家々ニアマタアリ。カクシルシ侍モサラニメヅラシカラヌコトナレド、神代ヨリ継体正統ノタガハセ給ハヌ一ハシヲ申サンガタメナリ」としている事によって明らかである。結局、皇位の継承は神代の昔から正理によって行なわれたということを、歴史によって証しようとしたのが、『正統記』述作の目的であったということになる。

次に『正統記』の構成と叙述について見ると、本書の冒頭には、「大日本者神国也。天祖ハジメテ基ヲヒラキ、日神ナガク統ヲ伝給フ。我國ノミ此事アリ。異朝ニハ其タグヒナシ。此故ニ神国ト云也」という有名な文章がすえられている。ついで、我が国の国号の呼び方や書き方およびその由来、世界における我が国の位置、インド・中国における天地開闢説の紹介と我が国の特殊性について述べた上で、本書執筆の目的にふれている。以上は本書の序論ともいふべき部分であつて、世界の中における日本という国の位置づけと日本の特殊性を説き、日本とはどういう国かをはっきりさせることに主力を注いでいるように考えられる。

序の部分にひきつづいて、我が国における天地の開闢から、天神六代の出現およびイザナギ・イザナミの二神の国生み、地神五代の行迹に説き及んでいる。天皇家の先祖を日神に求め、そこに日本国の特殊性を見出している正統記の史観からすれば、この部分こそは正統記の根源をなす部分といふべきである。その中で、天照大神の子孫がこの国土に君臨すべきことを述べた神勅を引用したあとで、三種の神器の徳について、次のように述べている部分は特に注目すべきである。

三種ノ神器世ニ伝^{ツタハル}コト、日月星ノ天ニアルニヲナジ。鏡ハ日ノ体ナリ。玉ハ月ノ精也。劍ハ星ノ氣也。フカキ習アルベキニヤ。(中略)鏡ハ一物ヲタクハヘズ。私ノ心ナクシテ、万象ヲテラスニ是非善惡ノスガタアラハレズト云コトナシ。其スガタニシタガヒテ感應スルヲ徳トス。コレ正直ノ本源ナリ。玉ハ柔和善順ヲ徳トス。慈悲ノ本源也。劍ハ剛利決斷ヲ徳トス。智恵ノ本源也。此三徳ヲ翕^{アハセ}受ズシテハ、天下ノヲサマランコトマコトニカタカルベシ。神勅アキラカニシテ、詞ツバマヤカニムネヒロシ。アマサヘ神器ニアラハレ給ヘリ。イトカタジケナキ事ヲヤ。

ここでは、三種の神器を、君主たるものが、天下を治めるのに必要な三つの徳の本源と解することによって、神器